研究所だより

第３５４号
２０１５年１０月　１日
発行：土佐清水市教育研究所
ＴＥＬ　８２－３０１５

“夕やけ小やけの赤とんぼ　負われて見たのは　いつの日か
山の畑の桑の実を　小かごに摘んだは　まぼろしか”
唱歌「赤とんぼ」

～収穫の秋・紅葉の秋～

お彼岸が過ぎ、朝夕もずいぶんと涼しくなり、早朝は肌寒さを感じるようになりました。８日は“寒露”、「野草に冷たい露が宿る」という意味です。この頃は、秋も深まって山では紅葉も色づき始める頃と言われています。日中はまだ暑いと言っても、吹く風や周りの景色は着実に秋色に変わりつつあります。

＜土佐清水市教育研究集会・一日教研各地区の反省＞

１．午前：講演について

【西部地区】
＊普段自分たちがしていることを理論的に整理して話してくださり、具体的な手法を紹介してくださった内容だったので、２学期以降の児童生徒との関わりに生かしていける内容でとても良かった。
＊ご自身の実体験を元に話された内容だったのでわかりやすく自分もやれると思えた。
＊職場の中でこっそり見守りエンジェルになる「エンジェルハート」の取り組みが心に残った。２学期はまずこれから学級づくりに生かそうと決めました。
＊出席人数はほぼ予定どおりだったようですが、会場が空いているように感じた。（職員が少なくなったのですね。）

【東部地区】
＊分かりやすい講話でとても良かった。
＊講話の内容にすぐ引き込まれた。

【半島地区】
＊わかりやすく、いい講演だった
＊子どもたちの興味関心などを上手に引き付けることができるようなことを数多く教えていただき、現場でも積極的に実践していこうと思った。
＊話の内容がわかりやすく、楽しく聞けた。

【清水Ⅰ地区】
＊講演内容が具体的で分かりやすかった。
＊実践につながる内容で良かった。
＊内容が即、実践につながるものだったので興味深く聞けた。
＊今一番自分が勉強したいテーマだったので２学期から取り組んでいきたい。
＊分かりやすい話で良かった。自分の実践に即、使えるようなものがありとても参考になった。
＊鹿嶋先生の講演、とても良かったです。「ほめる」→「認める」なるほどと思いました。市内の子どもたちの自尊感情を育てるためには上記のことを実践した。市内の子どもたちの自尊感情を育てるためには上記のことを実践することと思います。日々の生活や授業でできるように、さらに校内で意思統一できるよう心掛けます。

【清水Ⅱ地区】
＊日程・運営に関しては特になし。
＊講師はたいへん良かった。

２．午後：各部会について

【西部地区】
＊各部会の研修内容についてそれぞれが報告をした。どの部会も時間いっぱい熱心に研修や、教材研究に取り組むことができていた。
＊校内で報告をし合うことで、それぞれの部会の取り組みや活動を知ることができたし、情報交換ができました。
＊会場（清水中 パソコン室）が重複していることを研究所からの連絡で知った。事前にわかり良かったが、パソコンを使用しての研修を計画していたため、会場変更や準備物等に手間取った。重複を避けるため、各部会において会場を設定した段階で早めに会場校の所属長に連絡し、承諾を得ておいてほしい。

【東部地区】
＊午前の話とつながりがあって、部会でも研究を深めることができた。（教育相談部会）
＊小･中の交流ができて良かった。（国語部会）
＊中学生の吹奏楽の演奏を聞いたり、練習風景を見せてもらえ良かった。小中学校で身につけたらよいマナーなどについての話や、教材研をすることができて良かった。（音楽部会）
＊小中連携としては、中学校の先生が、小学校に数学の授業をする計画を立てることによって、連携が進んでいっていると思う。ＩＣＴを活用して、小学生でも分かるような中学校の数学の授業を計画している。
“斉藤さん”等の問題有る無料アプリのことを聞き、改めてスマートフォンの危険性を痛感した。児童・生徒が危険に巻き込まれないよう、教師も知っていく必要性があると感じた。（情報部会）
＊来年度へ向けての保健調査票・結核問診票をほぼ完成することができた。歯の保健指導で使用する全学年の教材作りは途中までである。（養護部会）

【半島地区】
＊時間設定、内容設定については良かった。（社会科部会）
＊高知新聞社の塚地さんの話が聞けて良かった。（人権部会）
＊有意義な時間を過ごせた。
＊ジオパークの話もあり、地域の教材で学習する楽しさが見られたし、小学生を対象にした楽しく興味を持つ実験ができた。（理科部会）

【清水Ⅰ】
＊それぞれの部会で計画通りできて良かった。
＊小中連携の話ができて良かった。
＊６年生の「比例」の教材研究を中心に部会を行い、中学校での「関数」へのつながりを確認できた。（算数部会）
＊中学生の詩を読ませてもらったり、とても内容の濃いものであった。２学期からの実践に生かしたい。（国語部会）

【清水Ⅱ】
＊小中の交流ができるような運営の仕方はできないものだろうか。互いを知ることで日常的な交流ができるのではないか。

３．来年度に向けて

【西部地区】　＊特になし

【東部地区】
＊今年度のように話が上手な講師を希望する。
＊日程については例年どおりが良いという意見もあった。

【半島地区】　＊特になし

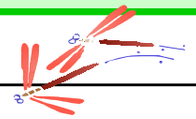
【清水Ⅰ】
＊来年度の講師として下記の方を希望します。
・大木聖子先生（防災）
・菊池省三先生（教育研究実践家）
・ユニバーサルデザインの授業についてお話できる方
・今年度ように市内の子どもたちを取り巻く環境に応じた講演
＊準備や当日のお世話等、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

【清水Ⅱ】
＊今年度のように学級経営であったり、人間関係づくり、ライフスキルについての研修ができれば良いと思う。
＊菊池省三先生はどうでしょうか。

たくさんの先生方が感想を提出してくれましたが、紙面の都合上ごく一部で申し訳ありませんがご紹介します。

○本当に具体的で分かりやすく、２学期から実践にすぐ生かせて、良い関係で授業ができそうでな自信が持てました。いろいろしてみたいことがありますが、エンジェルハートやビブリオバトルをすぐやってみたいです。ありがとうございました。また先生のご講演を聞きたいです。
○鹿嶋先生の講演を聴くのは２回目ですが、今回の講演もとても分かりやすいお話で、自分の学級経営に生かしていきたい内容がたくさんありました。特に「褒める」ことでなく「認める」こと、○○バトルで学習意欲を上げて学力をつけていくこと、席替えの後の感謝状は２学期に早速取り入れていこうと思います。ありがとうございました。
○『感情を受容する大切さ』『ほめる承認する大切さ』『内発的動機付け』まさに今、部活の指導で悩んでいるところでしたのですぐに実践していきます。子どもたちに対して「怒られるからする」「ほめられるからする」のではダメだという気持ちが抵抗していつもあったので何か光りが見えた気がします。
○子どもが行動を起こしたときは、その行動だけを見るのではなく、行動を起こすまでの原因を知り、その上でやったことの行動を叱ることの大事さを学びました。子どもはほめて伸ばすとよく言われますが、ほめるのではなく承認してあげることが大事ということもわかりました。また、２学期にクラスで使えるような演習もあり、ぜひやってみようと思いました。ありがとうございました。

前号で紹介しきれなかった鹿嶋真弓先生の実践を紹介します。



☆学級経営のストレスとその予防②

２　特別なニーズがある子どもがいる場合の基本的な適切な対応：その子のできていることに注目

特別なニーズがある子どもは、多かれ少なかれ学級にはいる。極端に反応が遅かったり、想定外の行動をしたり…。しかもそれらの行動はすべて突然やってくるため、とっさの対応に困りどうしたらいいかわからなくなる。ましてや、その行動が、授業妨害になったり、学級の秩序を乱したりする場合、教師が注意するのは当たり前であろう。しかし、その子にしてみれば、いつも自分は叱られてばかりで、ほめられることや認められることはない…と、徐々に不満がたまっていく。目の前にいる教師は、自分のことを理解しようとするどころか、何かにつけて注意ばかりしているので、素直になれるはずもない。そうした素直ではない態度に、教師の対応はますます注意が増え、厳しさも増やしていく。悪循環の始まりである

。

（１）特別なニーズのある子への対応を大変だと感じるのは

通常学級においても特別なニーズのある子への支援が当たり前とされるようになってきた。しかし、すべての教師が、特別支援教育や発達障害に関する専門的な知識をもって指導しているわけではない。いままで培ってきた生徒指導や学級経営を駆使してもうまくいかず、学級崩壊にいたるケースも少なくない。いままでのやり方では通用しなくなってきたのは、その子の困難さの原因がわからないため、その子への支援の方法もわからないからである。しかし、まわりの子にも迷惑をかけるため、教師は注意をする、叱る、怒るといった行動に出る。その子への支援ではなく、ダメなものはダメなので、注意することを否定しているわけではない。注意することイコール、大きな声で怒鳴ったり、感情的になったりすることではないことをわかってほしいだけである。毅然とした態度で、静かにふつうにダメなものはダメと伝えればいいわけだ。日頃からその子との関係性が良ければ、ふつうに伝えただけで、その子の行動修正につ

（２）日ごろからその子との関係性を良くしておくには

いつも叱られてばかりで、ほめられることや認められることのない子の不満をためないための方法は、ほめられることや認められるチャンスを増やすことである。特別なニーズのある子だからといって、いつもできていないわけではない。例えば授業中、勝手に立ち歩いてしまう子は、いつも勝手に立ち歩いているかというとそうでもない。イスに座っている時間のほうがはるかに長いこともある。ただ、勝手に立ち歩くという行動が教師には気になるので、どうにかしてその行動を止めさせようと厳しく注意する、という悪循環に陥ってしまう。ここでちょっと視点を変えてみよう。ふつう教師はその子が望ましい行動(例えば、授業中、立ち歩かずに着席している)ができていても、それはできて当たり前なので、何かのはたらきかけもしない。しかし、望ましい行動ができているときこそ、ほめたり認めたりするチャンスである。年齢によっては、当たり前のことをしていてほめられるのも、なんだか変な（いやな）気持ちになる場合もあるので、ここは認めるほうが自然である。具体的には、その子のそばまで行って「座れているね」と声をかけたり、グッドサインを送ったり、目を見てうなずいたりするのである。こうすることで、その子は、できていない部分、ダメな部分でなく、できている自分を見ていてくれたと実感できる。こうしたはたらきかけは子どもと教師の関係を良くしていくし、教師も注意するよりやりやすい。

（３）ストレスをためない魔法の言葉：例外さがし

教師が子どもたちのできていないことに注目すると、学級やその子はマイナスに変化する。逆に、教師が子どもたちのできていることに注目すると、学級やその子はプラスに変化する。子どもたちや学級のできていいないことばかりに目が行くときこそ、例外さがしをしてみる。できていいないことにとらわれそうになったら呪文のように唱えよう。「例外さがし、例外さがし」

何をするか：その子のできていることに注目する。
何をしてはいけないか：その子のできていないことに対し感情的に注意すること。
魔法の言葉：例外さがし。

３　困難度が重いときの対応の仕方：一人抱え込まない

担任の守備範囲は本当に広い。しかし、学級経営でも特別なニーズのある子への対応でも困難度が重いときは、自分一人で抱え込まず人を巻き込むことが大切である。早い段階で、学年主任や教育相談担当者、特別支援コーディネーター等に相談し、専門家と連携をとりながら、チーム支援体制を整えることが大切である。

筑波大学の石隈利紀先生の研究室のドアには、「みんなが資源、みんなで支援」と書かれている。私はそれを見るたび視野が広がり、勇気づけられた。

何をするか：チーム支援、専門家との連携。
何をしてはいけないか：自分一人での抱え込み。
魔法の言葉：みんなが資源、みんなで支援。
（ｂｙ筑波大学石隈利紀先生）

（「指導と評価」７月号より　日本教育評価研究会）